

第30回研究会を終わって

栗本 雅 司

岡山実験動物研究会会長

1982年12月、岡山郵便貯金会館を会場にして発足した岡山実験動物研究会もその後13年余が経過しました。

継続は力からなりといわれますが、昨年の12月には一つの節目となる第30回の研究会を開催する事が出来、本号巻頭には当日の参加者の写真（参加者の一部しか写ってませんが）を載せることが出来ました。

会員の皆様そして幹事役を務めて下さる先生方のご尽力のたまものと御礼申し上げますとともに、会員の皆様とともに喜びを分かちあいたいと思います。

研究会、学会、ベンチャー企業、同好会等々、凡そ会と名が付く集まりは発起人の事前の抜かり無い準備と熱意と夢によってスタートしますが、初めから一本調子に右肩上がりの順調な発展をする例は少ないと思います。

当研究会もご多分に漏れず一時は研究会活動と財政の両面で苦しい局面がありましたが、会員諸氏のご努力と賛助会員の募集、岡山県新技術振興財団からの研究会共催等のファイナンシャル・サポート、会報制作費のコスト低減等により回復しつつあり、健全化の方向に向かっております。

ガルーダ・インドネシア航空の事故を見るまでもなく、当研究会も危険で難しい滑走離陸の時期を過ぎ、巡航高度までの上昇もほぼ終わり、そろそろ安定飛行に入ってフライトアテンダントの食事サービスも始まるかという頃だと思えます。

立ち上がりの数年間が勝負で、それを過ぎればもう墜落の危機は去るのでしょうか、今度はマンネリ化、惰性でダラダラとした状態が生ずる可能性があります。

そのような意味では当研究会もこれから難しい時期に入り会員諸氏の一層の発奮とご協力が欠かせない事になります。

一方目を外に向けると昨今の話題といえば、医療、感染疾患に関わる事柄が目につく。

血友病患者の治療のための非加熱製剤に端を発したAIDS問題はすでに政治問題と化し産、官、学の倫理、姿勢が問われています。

岡山県邑久町に端を発した病原性大腸菌O-157による溶血性尿毒症症候群はその後患者が全国に拡大の様相を見せているが未だに感染経路ははっきりしない。

イギリスで発生した牛の恐牛病こと、海綿状脳症も畜産々業はもとより、医薬、化粧品、ペット業界にまで影響する大きな問題となった。

聞くとところによれば海綿状脳症はプリオンと呼ばれる耐熱性の高い蛋白質が原因物質といわれる。羊の海綿状脳症スクレイビーに罹った羊を飼料などに利用したのが原因ではないかといわれる。

発端国のイギリスでは畜産業が壊滅するほどの大打撃を与えているし、わが国でも北海道でスクレイビーに罹った羊が発見され、北海道産の牛肉は大丈夫なのかとか畜産業への影響も大きい。

ヒトへの感染の可能性も疑われ、クロイツフェルト・ヤコブ病の原因ではないかともいわれることから、日本の厚生省も平成8年4月10日付けで各都道府県を通じて英国産ウシ由来物を含有する医薬品、医療器具、医薬部外品または化粧品の製造、輸入実績について至急報告するよう関連各社に通達を出している。

我が岡山実験動物研究会の関連する分野は実験動物、動物実験、分子生物学的アプローチ、トランスジェニック、ノックアウト動物等々、また会員は医、薬、理、農、工、栄養、心理等々の専門家あるいは製薬、機器、飼料等の企業の面々と多種多様、多士済々である。

何か世界に発信するものを期待していい時期が来たと思います。

会員諸氏のご活躍を期待します。